

御伽草子、その二

によるによる

錦織
近

ずいずいずっころばしごまみそずい
ちやつぼにおわれてとっぴんしゃん
ぬけたあらどんどこしょ
たわらのねずみがこめくってちゅう
ちゅうちゅうちゅう
おっとさんがよんでもおっかさんがよんでもいきっこな～ああしいよ
いどのまわりでおちゃわんかいたのだああれ

いどのまわりでおちゃわんかいたのだああれ

隙間ができるほどにゆるく握った拳を、何人かが輪を描くように差し出す。その小さな輪を、鬼となった者が「ずいずいずっころばし」とうたいながら、順番に人差し指でたどっていく。うたい終わったときに指がさした拳の主が、次の鬼だ。

あんちゃんや弟たちとこの遊びに興じていたころ、童唄はただただ韻を踏むものでしかなかった。おちゃわんを割った者の不幸なんか、考えようとしなかった。けれどもひんやりとした床に敷かれた薄い布団の上で、庚（コウ）はその唄の最後の部分だけを思い出しながら、さめざめと泣く。

おちゃわんかいたのだああれ。

知っていなさるでしょお。私だってことは、知っていなさるでしょお。それを知っていなさるからこそ、こんなこっぴどいお仕置きをなさろうとしているんですよ。

ああ、怖いよ。

怖いよ母ちゃん。

母親があんなことを言わなかったら、庚（コウ）にも、せめて口のなかで米平糖を転がすくらい幸せが待っていたらうに…。

その日、庚は奉公先のお勝手に皿を洗っていた。饅頭のようにぷっくりとした手ではあるが、その甲の表面は爛れて赤い。そこに滲む血は、絶え間ない洗い場の仕事に滲むことすら許されず、冷たい井戸水に流されてゆくのであった。

洗い終えた皿を拭いて片づけようとしているとき、するりと手が滑った。あっと声を漏らすより早く、皿は砕け落ちた。それは、おかみさんが気に入っている皿だ。今日は大切なお客さんがくるからと、おかみさんがわざわざ奥から出してきた、見た目にも高そうな皿だ。いったいいくつかの色を使えばこんなきれいな模様が描けるのかしらんと、その皿を見て庚は思わず息を止めたものだった。

その皿が手元から床に落ち、こなごなに割れて砕けた。色とりどりに描かれた美しい模様は、ついさっきまで手を取り合っていたことも忘れたように、冷たい表情で飛び散っている。

このとき割れた音に気づいて、誰かが飛んできていたらよかったのに。

大声で庚の失態をののしったとしても、その方がまだ、庚は救われたらうに。

しかし不幸にも、おかみさんは客をもてなすのに夢中でお勝手の音なんか聞こえなかったし、庚が姉さんと呼ぶ三人の女中も、一人は風呂釜の火をおこしに、一人は足りなくなった酒を買いに、そしてもう一人はおかみさんの手伝いで客間に行ったきりとそれぞれ忙しく働いていたから、誰も、庚の不始末を知るどころではなかったのだ。

皿を落としたときのままの格好で石のように固まった、庚の小さな身体。無垢な黒い瞳だけが、床に散らばった破片を数えるように小刻みに動いている。「どんくさい娘だねえ」とおかみさんや姉さんたちから言われている庚ではあるが、それでもさすがに、その破片が元通りにならないことくらいはわかった。

とんでもないこと…、とんでもないこと…、とんでもないこと…

そう繰り返す自分の言葉が針のように心を突き刺し、身体中に痺れが走る。

「庚や、お酒はまだかい」

客間から伸びてきたおかみさんの艶っぽい声に、ふと、我に返った。とりあえず、片づけておこう。あとでお客さんが帰って一段落したら、手をついて、おでこを床にすりつけておかみさんに謝ろう。こっぴどく叱られるだろうけれど、ぴしゃぴしゃと雑巾で顔を叩かれるかもしれないけれど、いいや、もしかしたらおひまを出されてしまうかもしれないけれど、それも仕方ない。もう、諦めるしかない。とりあえず、お客さんがいるうちは何事もなかったように取り繕うのだ。

指先に小さな切り口ができるのを構う間もなく、破片を拾い集めて元の箱に片づけると、庚は瓶に残ったわずかな酒を爛につけるのだった。

運が悪かった。その夜、客を見送ったおかみさんは、いつものように女中や奉公人に小言を言うこともなく、自分の部屋に去ってしまった。したたかに酔っただんな様の肩を抱きかかえるように部屋までの廊下を歩くおかみさん、その後姿を、庚は少しだけ追った。けれども奉公人の分際である。それ以上、追うことは許されない。

皿を割ったことを詫びなくてはという庚の切羽詰った思いは、薄暗い廊下の隅に、ぽつんと置き去りにされるしかなかった。

翌朝、おかみさんの機嫌はことのほか悪かった。「酒の飲み過ぎさ」と、姉さんたちはひそひそと陰口を叩いているが、何が原因でおかみさんの機嫌が悪いのかなんて、庚には関係ない。そんなことよりも、おかみさんの機嫌が少しでもよくなったら、そのときこそ夕べの不始末を告げて謝ろう——そう思えばこそ、米神を押さえながらケンケンとしているおかみさんにも、必死に仕えようとする庚であった。

しかしそんな庚の思いを突き放すように、おかみさんの機嫌は一向によくならない。「大切な皿を割ってしまいました」——そのひとことを言い出せぬまま、二日、三日と、時は狂おしく過ぎていった。庚を苦しめる色とりどりの破片たちは、密かに、庚の行李にしまわれたまま…。

それから幾日経っただろうか。庚の夢に、奉公に出される前の実家の風景が映った。

母親は怒るとすぐに手を挙げる人だったが、その日はことさら荒れていた。三才になったばかりの弟は、粗相をして、震えながら泣いている背中を蹴り飛ばされた。それを庇おうとした十才の兄は、「余計なことをするんじゃない」と、平手で頬を叩かれた。庚も例外ではない。いや、それどころか一番激しかった。水屋の引き出しにしまっておいたはずのお金がなくなっている。

「庚、庚、こーお！」。わけもなくそれを庚のせいにした母親は、庚を呼びつけると思い切り叩いた。立てかけてあった箒をつかむと、その柄の先で庚の頭を、顔を、腰を、容赦なく叩いた。

「金をどこに隠したんだい」

「えっ、どこに隠したかって聞いてるんだよ」

その顔は、鬼だった。そして、叩かれるまま泣き叫ぶ庚に向かって、母親は言ったのだ。

「いいかい、悪さを隠すと」……

夢は、ここで途切れた。

絹のように細く艶のある髪が、汗ばんだ庚の額にぴたりと張りついている。あどけない口から漏れる息は荒く、長い睫毛は涙を吸って湿っている。

あのとき、かあちゃんはこう言ったんだ。

「いいかい、悪さを隠すと」。そう言った口元をぐにやりとひきつらせて、
「人のお腹ん中には三匹の虫がいてね、隠してることがあるとそれがよろよろ這い出てきて、天のお人のところに言いつけにいくんだよ」

そう、かあちゃんは言ったんだ。

それは、天のお人が決めた日の晩に起こるといふ。悪さを隠していると、その晩、人がぐっすり寝入った頃を見計らい、腹の中の三匹の虫が口や目や耳や鼻といった穴からよろよろと出てきて、闇夜の道を天のお人がいるところまでうねうねと這って行くんだそう。だから、悪さを隠しても、いつか天のお人の耳に入って、お仕置きに、三匹の虫が這い出てきた穴を全部塞いでしまうんだそう。

天のお人…。それはきっと、とてつもなく偉い人なんだろうと思った。

思い出したくないあの日の風景を背負ったまま、庚は、三匹の虫を想像した。人の身体の穴からよろよろと這い出してくる虫、それはいったいどういう形をしているんだろう、どういう色をしているんだろう。お腹の中にいるのだから、お腹よりは小さいはずだ。耳や鼻の穴から出てくるというのだから、小指の先っぽくらいに細いはずだ。じゃあ、ナメクジみたいな虫かしらん。ミミズみたいな虫かしらん。

ふと、それが自分の耳や口から這い出してくる姿を想像してしまった。

—やだよお、かあちゃん、やだよお。

庚は思わず、両手で自分の耳を覆った。慌てて、折り曲げた膝っこぞうで口を覆った。でも、これではまだ目と鼻の穴が出しっ放しだ。耳を覆った両手はそのままに、庚は膝と太ももとつま先をあれやこれやと使って、目と口と鼻の穴を覆ってみようとした。けれども、どうしてもすべてを覆うことができない。口と鼻の穴を覆うと、太ももから口がはみ出してしまう。口を覆うと、片方の目と鼻の穴のがはみ出してしまう。

暗がりの中で、庚は必死に戦った。「やだよォ、やだよォ」と声にならない声で叫びながら…。涙と鼻水で膝ッ小僧をぐしょぐしょに汚しながら…。

おちゃわんかいたのだああれ

おちゃわんかいたのだああれ

ごめんなさい、ごめんなさい。隠そうなんて、これっぽっちも思っちゃいなかったんです。悪さを隠そうなんて、私、そんなこと思っちゃいなかったんです。

翌朝、姉さんのひとりがいつまでも起きてこない庚に腹を立てながら、バシッと部屋を開けた。手拭いで目隠しし、鼻と口を隙間なく覆うようにきつく手拭を巻きつけ、ぷっくらとした手でぎゅうっと耳を押さえたままの格好で、庚は、冷たくなっていた。

泣き濡れた手拭いが救いようのない哀れを語っていたことを、ついに、誰も知ることがなかった。